

<研究資料>

アメリカにおけるセラピューティックレクリエーション
研究の発展史に関する研究
—歴史の発祥期から中世まで—

堀田 哲一郎¹

A study on the history of the development of therapeutic recreation
research in the USA -Concerning on from the dawn of
human history to the middle ages-

Tetsuichiro Horita¹

Abstract

To clarify the history of the development of therapeutic recreation research in the USA, this paper is limited to a study beginning between the dawn of human history and the Middle Age. It is based on a book by Carter, et.al. (2003) and 4 earlier books (Frye, et. al., 1972; Kraus, 1973; Avedon, 1974, O'Morrow, 1976). From an examination of these books, it was found that 4 earlier books contained contents in which Carter's lacked. It is therefore important to arrive at information that is undisputable and universally agreed upon in order to make clear the history of the development of therapeutic recreation research in America.

1. 問題設定

セラピューティックレクリエーションについて取り上げた論文をCiNiiで検索したところ、実践に関わる研究がほとんどであり、そのなかで唯一、茅野(1987)¹⁾のみが、その時点でのセラピューティックレクリエーションに関する研究動向を整理したものであった。ただしそこでは、定義に関する典拠として、アメリカ文献のアベドン(1974)²⁾、オモロウ(1976)³⁾、クラウス(1978)⁴⁾、ケリーら(不詳)⁵⁾を取り上げており、日本レクリエーション学会内での論文では、「史的領域はなかった」と結論づけている。また、訳本として、いずれも今井毅の手になるホーン(1976)⁶⁾及びオモロウ(1976)⁷⁾を挙げている。

アメリカにおける近年のセラピューティックレクリエーションに関する概説書には、カーター他

(2003)⁸⁾、ディーザー(2008)⁹⁾、ケンシンガー(2009)¹⁰⁾の3点において歴史に関する叙述を見出すことができた。そのうちカーター他(2003)の叙述が最も詳細な内容を取り上げていることがわかった。

ディーザー(2008)は、歴史の叙述を1700年代から始め、セラピューティックレクリエーションの歴史を学ぶ意義として、次のように述べている。セラピューティックレクリエーション指導者が、50年以上の間、療法及び余暇という二つの極端な志向性に分極化し、原理上の闘争を行ってきたことで、専門的立場を損なってきたため、その誤りを繰り返すことを防止し、成功に学び、今日の専門職の自己認識を培うことに有用であると¹¹⁾。

ケンシンガー(2009)は、専門職の起源として、古代文明において存在していた原則及び考えに関

連した様々な専門分野（例：教育、哲学、売春、医学、看護、ソーシャルワーク、レクリエーション）に遡ることができる」と述べている。彼女はまた、エリオット・アベドンの1974年の教科書に依拠して、19世紀半ばにフィリップ・ピネル及びW・A・F・ブ라운が、治療におけるレクリエーションの価値を認識したこと、またそれと同時期にフローレンス・ナイチンゲールも、看護におけるレクリエーションの目的活用を導入したことをその始まりとして挙げている¹²⁾。

この2人のように、セラピューティックレクリエーションの歴史の始まりを19世紀半ばか、あるいは18世紀初めというごく新しい時期に求めるだけでは、レクリエーションが療法的に活用されてきた歴史的淵源の古さを認識するには不十分であり、また今日のセラピューティックレクリエーション専門職が様々な療法を司る立場にあることの背景の理解には到らないであろう。

カーター他(2003)は、1970年代初めのアメリカにおけるセラピューティックレクリエーション研究の草創期に作成された教科書として、5点の著書(フライ他, 1972¹³⁾; クラウス, 1973¹⁴⁾; アベドン, 1974²⁾; オモロウ, 1976¹⁵⁾; ガン他, 1978¹⁶⁾)を挙げている¹⁷⁾。これらのうち、ガン他(1978)には、全く歴史的叙述がないので検討対象から除外し、それぞれとカーター他(2003)自体における歴史的発展経過の叙述を比較検討してみたい。今井によって翻訳されたオモロウの著作は、4点のなかで最も遅い時期に書かれたもので、先行する3点の叙述を踏まえた内容であり、大筋の歴史を効率的に理解するには適切なものであるとみなしうる。けれども、場合によっては、オモロウが叙述していない内容にも、興味深い叙述が表れている場合があり、先行するそれらの3点の著者の業績に対しても再評価される価値があると考えられる。また、そのうちケンシンガーが大きく評価しているアベドンの著作についても、それだけですべての歴史を網羅しているわけではないことを立証できると考える。よって、本稿においては、検討対象文献をこれらの5点に限定するとともに、検討する時期を、ディーザー(2008)及びケンシンガー(2009)が取り上げていない歴史の発祥期から中世までとする。

なお、本稿において取り扱う「セラピューティックレクリエーション」とは、療法的効用のあるレクリエーションの性質や活動内容を指しており、それらの歴史を紐解くことで、内実を明らかにしていくことになる。

2. 歴史の発祥期におけるセラピューティックレクリエーションの原初形態についての叙述

フライ他(1972)では、特に紀元前2000年頃の古代エジプトの寺院で、憂鬱の軽減を求める「高貴な生まれの人々」に対して「愛らしい夢見心地の庭園と、寺院の少女によって上演された歌及びダンスのような要素の環境及び雰囲気の療法的可能性が、その時代の何人かの宗教的指導者によって十分に認識され、憂鬱な気分の効果的な解消方法として提供されていた」ことを例示しながら、「司祭の何人かは、現代の環境療法の概念に精通していたと言えよう」と述べられている¹⁸⁾。このように、レクリエーションが歴史の発祥期から宗教とも結びつき、健康回復や癒しの作用を果たしてきたことが明らかにされている。

クラウス(1973)では、フライ他(1972)と同様に、紀元前2000年頃のエジプトで設立された寺院において、精神病治療のためのゲームその他の娯楽が提供された様についての描写とともに、レクリエーションが歴史の発祥期から宗教とも結びつき、健康回復や癒しの作用を果たしてきたという認識において共通している。その一方で、フライ他(1972)で言及されなかった歴史的事実の例示として、次のようなことが挙げられる。クルセンの明らかにした、紀元前7000年頃の旧石器時代にも遡る、自然に発見された日光療法、水治療法、マッサージ等の療法の起源、そしてアベドンの明らかにした、紀元前3000年頃の古代中国における「呼吸、座位、膝立ち、横臥、立位で組み合わせられた自由な運動」や、「供え物をなし、銅鑼を鳴らし、爆竹を射つことによって、悪霊を驚かすような魔術の実践」を含むような「医療道場及びマッサージの様々な様式」が活用されたり、外科医が手術の傍ら、卓上ゲームで重傷者の気を紛らせていたこと、紀元前2世紀のインドのカシミール地方のチャラカという内科医が、患者に気

晴らしさせ、回復を促進するために玩具及びゲームの活用を提唱していたこと等、アジアの国々における古代文明での医療の発展において果たしてきた役割を取り上げる他、病気が悪霊の仕業とみなされていた原始社会において、「薬師や魔女医師が、病気の犠牲を治癒するために意図された詳細な儀式を実行し、この癒しの過程において、しばしば、芸術、ダンス、聖歌が活用された」として、「南西部アメリカインディアン」部族の風習が挙げられている¹⁹⁾。

アベドン(1974)では、古代エジプトにおける寺院の描写に関しては、先行する2点の著書と同様の引用がみられ、健康回復や癒しの作用と宗教との関係の深さが窺われる一方で、「古代エジプトの屋根板に割り込まれたゲーム盤」という人造遺物に着目するという考古学的な視点が独特である。中国及びインドに関する叙述は、クラウス(1973)が紹介した内容をさらに詳しく描写し、インドがチェス、双六、バックガモン、賽子の発祥地でもあることにも触れている。さらに、メソポタミア地域についても取り上げている²⁰⁾。

オモロウ(1976)では、「より初期における療法的動因としてのそれら〔セラピューティックレクリエーション(筆者註)〕の歴史的素描へのバージニア・フライ及びエリオット・M・アベドンに、われわれは恩義がある」と述べ、それらの研究者の業績を踏まえていることを明確にしつつ、先行する3点の著書と同様、精神保健治療のために建立された寺院の情景について初期のエジプトの書物の叙述内容が同様に提示されている。ところが、先行する3点の著書とオモロウとの取り上げ方の大きく異なるところは、ただ単にその時代における療法的効用の例とするだけでなく、それらが生み出されるような超自然的な力にすぎなかった時代的背景について科学的な解説を加え、セラピューティックレクリエーションの対象者である障害者の生存が脅かされていた過酷さとともに、保護的視点の萌芽にも目を向けていることには、大いに評価されるべきであろう。クラウス(1973)が自然に発見された療法として挙げていた日光、水、マッサージだけでなく、物理療法の材料も蒸気、砂、その他と多様で、鉱泉や温泉の活用もまた独特である²¹⁾。

けれども、古代文明の取り上げる地域を、エジプト及びメソポタミアに限定しており、中国やインドを取り上げていない点が惜しまれる。

カーター他(2003)では、「療法的活動は、文明化の始まり以来、病気や障害のある人々にケアするために活用されてきた。考古学者及び歴史学者による研究は、初期の文化が温泉、マッサージや、アヘン、ハッシッシ、サルサパリラ、アカシア、その他様々の病気の治療における多くの薬品のような投薬を活用したことを明らかにしている」という叙述のみであり、その原初形態を宗教との結びつきよりも、自然に発見された療法に限定している²²⁾。あえて言えば、唯物論的な姿勢ではある。

3. 古代ギリシャ・ローマ帝政期におけるセラピューティックレクリエーションの形態についての叙述

フライ他(1972)は、この時期について次のように述べている。古代ギリシャ・ローマにおいて癒しの神とされたアスクレーピオス(Asclepius)またはアイスクラーピウス(Aesculapius)は、音楽の神アポロまたはアポロンの息子である。その寺院が温泉も含み、最も有名なものでは、医療と、体育館、図書館、1万2千の観衆への競技場、1万6千の収容座席のある劇場を備えたレクリエーションセンターの機能も担っていた。そのことは、ヒポクラテスによる科学性の志向にもかかわらず、歴史の発祥期における宗教とレクリエーションとの結びつきを受け継いだものである。ユダヤ教とキリスト教の聖書の年代記でのサウル王の楽しい癒しの動因として、音楽の概念への初期の証拠が提供されている。また、2世紀のギリシャの解剖学教師及びローマの剣闘士への内科医であったガレンの功績や、陸軍と結びついた医療サービスや病院の整備をすすめたこと、キリスト教の興りが、貧者及び病者のケアへの人道主義的理想をもたらしたことを挙げている²³⁾。

クラウス(1973)において、フライ他(1972)と異なるところは、寺院の立地条件としての眺望の良さについて述べ、ガレンの行った療法的運動の内容を、軽い打ち合い、強打、ボール遊び、穴掘り、潜り、重量挙げ、縄登りと具体的に挙げ、カラカラ浴場については「最も壮大な様式におい

て何千もの人々に便宜を図った」ものであり、「大きな出費であった」と述べていることである²⁴⁾。全体的には、フライ他(1972)の域を超えるものではない。

アベドン(1974)では、フライ他(1972)にみられなかった挿話として、ギリシャの内科医メランパスがプロテウスの娘を走るゲームによって治療したこと、数学者のピタゴラスが精神障害の治療に体操及びダンスにつなげた音楽の活用を力説したこと、ローマにおいて実践していたギリシャの内科医ピテュニアのアイスクレピアデスが精神病患者を人道的に治療するために日光の下で穏やかな運動と音楽及び歌を提供したこと、ローマの内科医ソラスが座骨神経痛への治療として音楽の効果を賞揚したこと等、見受けられる²⁵⁾が、大筋の趣旨は共通している。

オモロウ(1976)では、ローマのケア制度をギリシャのそれと比較して、「非常に原始的で非科学的」と指摘し、「ギリシャから引き継いだ医学的知識を活用することに疑い深く、気が進まなかった」という評価には興味深い。アイスクラビウスの寺院の劇場の収容人数がフライ他(1972)と異なり、2万人となっている。キリスト教の考えについて、各々の人間の命の尊厳に重点を置いたものであり、レクリエーション運動の始まり以来現れた概念であり、「社会的組織としてのキリスト教会は、しばしばこれらの教えをきちんと果たすことに失敗した」ものの、「西洋民主主義社会の心臓部」になったと評価をしている²⁶⁾。

カーター他(2003)では、ギリシャ及びローマに共通する癒しの神への信仰がギリシャのみ一方しか叙述されず、宗教的影響のあるギリシャにも科学的合理性がみられ、科学性をローマが発展させたという構図となっている。キリスト教会の評価も、オモロウ(1976)における評価とは一部異なり、「人生の価値と、科学的知識の適用によって、それを保持することの望ましさを主張し、これらの努力は、保健サービスを提供するために構想された社会的組織の最も初期の形成を代表している」と述べている²⁷⁾。

4. 中世におけるセラピューティックレクリエーションの形態についての叙述

フライ他(1972)には、この時期についての叙述がみられない。

クラウス(1972)では、中世及びルネサンスの時期の間、様々な障害者、特に精神病患者は、動物のように扱われ、鎖につながれ、手枷をされ、神の怒りを追い出すために打たれ、拷問を受け、または怒りを鎮めるために回転ベッドや旋回する檻のような器具にかけられることになったが、例外的にシエナの聖カタリーナ及びプリュージュにおける聖ヨハネ病院のような2、3の病院において、美しいフレスコ画や絵画が、気晴らしを提供し、ケアを受けている疫病者やハンセン病患者の意欲を改善するために展示されていたことが述べられている²⁸⁾。

アベドン(1974)では、ベルシャの内科医の書いた本において、音楽の療法的活用や高齢者のケアが考察されたこと、1284年に完成したカイロのマンスール病院が噴水によって涼しくされ、司書のいる図書館があり、軽音楽が睡眠不足を寝つかせるために演奏されていたというような、イスラム世界の医療におけるレクリエーションの活用が挙げられている²⁹⁾。

オモロウ(1976)では、中世ヨーロッパにおいては、教会が絶大な権力を握り、内科医療は、「身体的な治療、魔術、儀式の奇妙な混成」となったこと、カイロのマンスール病院に代表されるイスラム世界における医療の発展が、十字軍を通してヨーロッパに拡大されたこと、17世紀に床屋に由来する外科医を聖職であった内科医と同等に高めたアンブロアーズ・パレが回復期も患者にゲーム、音楽、読書で退屈を軽減しようと気配りしたこと、肢体不自由者及び知的障害者が宮廷の道化として「保護」され、生計を立てる者も出てきたことが挙げられている³⁰⁾。

カーター他(2003)では、知的障害者が宮廷の道化になっただけでなく、独房に鎖でつながれた「狂人」も公衆の娯楽として活用されたこと、アンブロアーズ・パレの業績、教会の保健ケアの原理による患者への健康教育の提供が今日のセラピューティックレクリエーションにつながっていることが述べられている³¹⁾。

5. まとめ

以上、アメリカにおいてセラピューティックレクリエーション研究の草創期に作成された教科書のうちの4点の著書それぞれと、それらの著書を紹介しているカーター他(2003)自体における歴史的発展経過の叙述を、歴史の発祥期、古代ギリシャ・ローマ帝政期、中世の3つの時期に限定して比較検討してみると、そのうち最も遅く書かれたオモロウ(1976)も、先行する3点の著書の叙述内容をすべて包摂しているだけでなく、歴史的評価として不十分である部分があるため、互いに補いつつ、セラピューティックレクリエーション研究の発展史を明らかにしていく意義は大きい。本稿では、検討対象文献を限定したため、時期も歴史の発祥期から中世までに限定された。今後は、本稿で検討対象として除外したディーザー(2008)やケンシンガー(2009)、その他の文献も合わせて、現代に直結するセラピューティックレクリエーションの「誕生期」以降の様子について明らかにしていきたい。

<本稿は2010-2011年度の津曲学園鹿児島国際大学学外研修長期国外留学の成果の一部である>

註及び引用文献

- 1) 茅野宏明：セラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と今後の課題－日本レクリエーション学会における論文発表を中心に－、武庫川女子大学紀要 文学部編、第35集、183-189、1987
- 2) Avedon, E.M.: *Therapeutic Recreation Service: an applied behavioral science approach*, Prentice-Hall Inc., 1974. 所属：オンタリオのウォータールー大学
- 3) O'Morrow, G.S.: *Therapeutic Recreation: a helping profession (2nd ed.)*, Prentice-Hall, 1976
- 4) Kraus, R.: *Therapeutic Recreation Service: principles and practices (2nd ed.)*, W.B.Saunders Company, 1978
- 5) Kelley, J.D., Robb, G.M., Park, W., Halberb, K.J., and Edwards, N.J.: *Therapeutic Recreation Education: guidelines for a competency - based entry-level curriculum*, NRPA
- 6) ホーン・P.: レクリエーション：その医学的見解 (今井毅訳)、美巧社、1976
- 7) オモロウ・G・S.: セラピューティック・レクリエーション入門(今井毅訳)、不昧堂出版、1981
- 8) Carter, M.J., et.al.: *Therapeutic Recreation: a practical approach (3rd. ed.)*, Waveland Press Inc., 2003
- 9) Dieser, R.: History of Therapeutic Recreation, (In: Robertson, T., et.al. eds., *Foundations of Therapeutic Recreation. Human Kinetics*), pp.13-30, 2008. 所属：北アイオワ大学
- 10) Kensing, K.: TR Past, Present, and Future: a historical analysis of issues in therapeutic recreation, (In: Stumbo, N.J. ed., *Professional Issues on Therapeutic Recreation: on competence and outcomes*. Sagamore Publishing), 19-29, 2009. 所属：グランドバレー州立大学
- 11) Dieser, *op.cit.*, p.14, 2008
- 12) Kensing, *op.cit.*, 19-20, 2009
- 13) Frye, V., et.al.: *Therapeutic Recreation: its theory, philosophy, and practice*. Stackpole Books, 1972
- 14) Kraus, R.: *Therapeutic Recreation Service: principles and practices*. W.B.Saunders Company, 1973. 所属：ニューヨーク市立大学
- 15) O'Morrow, G.S.: *Therapeutic Recreation: a helping profession*. Reston Publishing Company Inc., A Prentice-Hall Company, 1976. 所属：インディアナ州立大学
- 16) Gunn, S.L., et.al.: *Therapeutic Recreation Program Design: principles and procedures*. Prentice-Hall Inc., 1978
- 17) Carter, et.al., *op.cit.*, p.51
- 18) Frye, et al., *op.cit.*, pp.16-17
- 19) Kraus, *op.cit.*, p.9
- 20) Avedon, *op.cit.*, pp.4-8
- 21) O'Morrow, *op.cit.*, pp.81-85
- 22) Carter, *op.cit.*, p.30
- 23) Frye, *op.cit.*, pp.17-18
- 24) Kraus, *op.cit.*, p.10
- 25) Avedon, *op.cit.*, pp.5-6
- 26) O'Morrow, *op.cit.*, pp.85-87

27) Carter, *op.cit.*, pp.30-31

28) Kraus, *op.cit.*, p.10

29) Avedon, *op.cit.*, pp.8-9

30) O'Morrow, *op.cit.*, pp.87-89

31) Carter, *op.cit.*, pp.31-32

(受付：2012年2月22日)
(受理：2013年1月30日)